
暗闇

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗闇

【Nコード】

N0163S

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

特急列車で起こる殺人事件となっています。

闇夜

「お休みのところ大変申し訳ありません。本日この列車の車掌をやらせていただいております鈴木でございますが、お客様の前に警察関係者はおりませんか？おりましたら大変申し訳ございませんが車掌室までお越しくださいます」

それは、午前0時を少し回ったところで、この特急列車ふるさとが出発してから4時間が経過したところだった。

この特急列車ふるさとは、東京から九州・福岡を結ぶ午後8時10分出発のふるさと203号。

僕の名前は広島隆。僕は、東京へ1年に1度の妻との旅行の帰りの最中であつた。僕の仕事は警察官。一概に警察といっても様々な担当があるのだが僕は、少年係で未成年の窃盗や暴力事件などを担当して今まで、殺人事件を担当したことがなかった。新人の頃はいつかは殺人事件の捜査をやってみたいとは思つてはいたが、その頃から10年も過ぎた現在はそのまま少年係をし続けたいとも近頃は思つていた。

このアナウンスを聞いていたのは妻の富美子だった。なぜかという、その時僕は熟睡していた。1年に1回の妻との旅行は毎年、地獄である。それは今年も例外ではなかった。先ほど、地獄といつたがなぜ地獄であるかという、妻は大の買い物好き。いや、それならまだいい。この妻の富美子の一番恐ろしいのはよくいる大阪のおばちゃん以上にとてもよくしゃべることである。しゃべるといっても、妻がひとたび話し始めればこれはもう、まるで暴走列車のようにブレーキがかかることなく1時間でも2時間でもしゃべり続ける。

そして、妻の暴走中に、僕が相づちをするのを忘れると、今度は僕の悪口を1時間でも2時間でもしゃべり続ける。ましては旅行中は

テンションが高いので話題がたくさん出てきやすいのか富美子のおしゃべりは止まらなかった。

妻のせいで疲れがでたのかは分からないが、いやっ、それしか考えられないが、僕はその時深い眠りについていた。ただ、僕が深い眠りに入っていたら、妻に起こされ事情を聞かされ、僕は

「そんなの黙ってればだれも僕が警察官だなんてわからないよ」と妻に言っ、また眠りに入ろうと横になったら妻から

「そんなことが私に通用すると思っっているの？あと10秒のうちに行かないと何をするかわか・・・」
妻の言葉をすべて聞く前に僕はもう重い腰を上げて布団から出ていた。妻の怖さは僕がよく知っっている。

僕は

「えーと車掌室、車掌室どこだっけかなあ」と呟きながらあるいてたら、6号車に入ったところようやく車掌室をみつけた。僕は、ノックをして

「失礼します」

と言っ、て車掌室のドアを開けた。その時、僕はなぜか車掌室のよくあるような普通のドアがとても重い鉛のような感じがして、すんなり開かなかったような感覚がした。

部屋の中には乗務員の方が3名いた。

「ひよっとして警察関係者の方ですか？」真中に立っ、ていた車掌らしき人物が話しかけてきた。

「そうですね、なにかあつ、たんですか？」

「落ち着いて聞いてくださいね。実は、乗務員が乗客らしき一人の遺体を発見しました」

僕は、その言葉を聞いたとき、今度は僕の体が一瞬金縛りにあつ、たように動かなかつ、たような感覚に陥つ、たような気がしたことを覚えてる。

闇夜（後書き）

ご意見・ご感想などがありましたら是非遠慮なく教えてもらえたら嬉しいです。

初めて小説を書いたのでいろいろ至らないところがあるとは思いますがよろしくお願いします。

詳細

「私は車掌の鈴木と申します。そして、隣にいるのが乗務員の山本と伊達です。早速ですが現場をご覧いただいてほしいのですが」
そう車掌の鈴木が僕に伝えると僕は警察官である自分の良心からか断ることが出来なかった。

そこで、僕は

「分かりました。ただ、一つみなさんに伝えておかなければならないことがあるんですけど」

「何ですか？」

と鈴木は聞いた。

僕は責任から逃れようと思い

「実は私は警察官といつても少年課ですし殺人事件の担当は一回もやったことがないんですが・・・」

鈴木はすぐに

「しかしあなたしかいないんですが」

僕はしぶしぶ

「そうですね。はははっ」

と苦笑いしたため息をついた。もうこれは逃げることはできないと僕は心の中で思った。

鈴木は僕に向かって

「笑っている場合ではないですよ。では現場に行きましょう」

と言った。僕には鈴木の姿がともたくましく見えたのであった。

我々は現場に着いた。

「ここです」

と鈴木が言った。

そこに乗務員が立っていた。我々がそこに着く前にすでに乗務員の小松が鈴木の命令で現場になるべく乗客を立ち寄せないために立

つていてほしいということでも立っていたというのであった。

車掌の鈴木によると乗務員はすべてで6人いるとのことだ。車掌の鈴木と乗務員の山本、伊達そして小松、また運転室に運転士の高木と副運転士の岡本だ。

現場は10号車と11号車の間にある男子トイレである。この列車は全16両からなっていてトイレは偶数列の後ろに男女1つずつ置かれている。第一発見者は幸いにも乗務員の山本であった。僕はやはり自分では怖くて開けられないので

「鈴木さんドアを開けてもらってもいいですか?」と言った。

鈴木は少しむっとした表情で

「広島さん。あなた警察官でしょ。開けてください。」と言った。

「いやっ、だから僕は警察官の中でも少年課で殺人事件の担当はやったことがないんですって」

「そんなこといったってあなたしかいないでしょ」

この一連のやりとりを聞いていた第一発見者の山本がしびれを切らしたようにドアを開けた。

「まさか・・・」

山本以外の僕たちは言葉を失った。いやっこの現場を見たのは2回目である山本でさえ顔面が硬直していた。

40歳代と思われる男性の遺体が便座の上で座りながら寝ているような感じで動いていなかった。見た目では外傷は見つけられず出血もなかった。

僕は人の死体を見たのは初めてであった。

「広島さんどうしますか?」

鈴木が僕に聞いてきた。

だが僕は何を言っているのか、何をすべきなのか全く分からなかった。僕の小さい頭脳でひねり出そうとしても言葉が何も出てこない。本当に僕は駄目な警察官だと思ってしまう感じがした。

そんな時、山本が車掌に

「ここになんかありますよ」と言って、死体のそばに落ちていた小さな物体を持ち上げた。

「これは鶴かな」鈴木が言った。

どうやら折り紙で折られた黄色い鶴のようだ。そして再び山本が発言した。

「その中に何か文字が書いてありますよ」

「貸してくれ」

僕が責任感からなのか好奇心からなのか分からないような精神状態の中、声を出して言った。

そして、僕は丁寧に折り紙を元の状態にしていくうちに書いてある文字が徐々に読めるようになっていった。そして僕が鶴の折り紙をきれいに全部開いた先には、ここにいる5人にさらに恐怖を与えるには十分であるようなメッセージが残っていたのだった。

詳細（後書き）

まだまだ日本語がおかしいところや文章がおかしいところがあると思いますが、どうか興味を持っていただけたら本当に嬉しいです。またご意見・ご感想などももらえたら嬉しいのでよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0163s/>

暗闇

2011年10月8日22時11分発行